

# 大学出版

No.

2006.11

69 秋

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

第10回

## 日本・韓国・中国 大学出版部協会 合同セミナー

特集

新しい協力関係の構築に向けて

——第10回日・韓・中大学出版部協会合同セミナーを終えて \* 小野 利家 ——2

三カ国セミナー10年間の回顧と展望 \* 三浦 義博 ——7

学術出版の国際交流

—— in search of sustainable publishing \* 竹中 英俊 ——12

韓国出版会の現状 \* 韓 淇皓 ——16

### ● 連載

ぎょう 行の建築 —— 比叡山延暦寺 堂行堂・法華堂 \* 松崎 照明 ——表2

歩く・見る・聞く  
知のネットワーク 41 武蔵野大学能楽資料センター ——20

大学出版部ニュース ——22

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

有限責任中間法人大学出版部協会



# ぎょう 行の建築

比叡山延暦寺 常行堂・法華堂

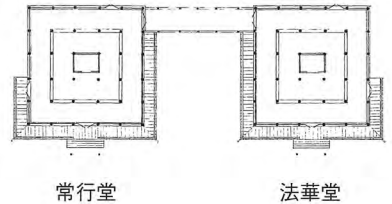
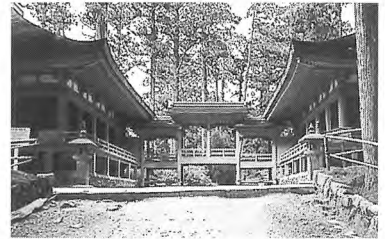
松崎照明  
(建築意匠)

京都の北東、都の鬼門を守る比叡山延暦寺には、平安時代以来、常行、常坐、半行半坐、非行非坐の四種の三昧行が伝えられている。

常行堂と法華堂は、この中の常行三昧と半行半坐三昧を行うための建物で、両堂はいずれも方五間の正方形平面とされ、同形同大の二つの建物が、渡廊で繋がれている。二堂が並び、廊下で繋がれるこの構成がいつ頃成立したかは明らかでないが、延暦寺の古い建物は正方形であることが多く、平安前期の東塔總持院でも、方五間の多宝塔を中心に、同じ方五間の灌頂堂と真言院が東西に並び、それぞれが昇廊で結ばれていたから、平安時代には既に造られていたかと思う。

全く同じ形の建物が並ぶ、外形の「双」の関係に対して、内部は片方を、ひたすら歩き続ける常行三昧の道場とし、一方は座ることを中心とする半行半坐として内容を変え、「一対」としているのは、対称を非対称の均衡へと変えてゆく日本特有の方法と言えよう。さらに渡廊の下は中央を一段高くし、その下を潜って西塔中堂正面へと至る門の役割をも兼ねさせ、廊と道が立体交差する見事な空間を造りだしている。

常行堂では、常行三昧が始まると、全ての扉は閉じられ、中央の本尊阿弥陀如来と四隅の壁に掛けられた阿弥陀の名号



現堂はいずれも文禄4(1595)年の再建だが、法華堂は天長2(825)年円仁らによって、常行堂は寛平5(893)年増命により創建されたと伝わる。

軸だけが灯明で照らし出される。行者は南無阿弥陀仏の名号を唱えながら、それをたよりに本尊の周りを右回りにぐるぐると回り続ける。三昧行は食事と用便の時間を除いて九十日間絶え間なく続けられるので、続けるうちに行者は歩きながら眠ってしまい、床に倒れ伏してしまう。倒れては起き、起きては倒れを繰り返すうちに、行者は、本尊の周りをぐるぐる回っていたはずの自分が、いつの間にか壁の阿弥陀如来に向かつて延々と真つ直ぐに歩いているように錯覚するのだという。今は描かれていないが、平安時代の堂内四方の壁には極楽浄土が描かれていたから、行者はあたかも極楽浄土に向かつてひたすら歩いていくように感じたはずである。堂内での肉体的な回転運動は、いつの間にか意識上での直線運動へと変換され、広大な仏の世界へと広がり出るのである。

後に、この常行堂の念仏三昧と建物の意匠が都へと降りて、平等院に代表される平安時代の繊細優美な阿弥陀堂建築が生まれ、行道は堂外へと出て千日回峰行に連なっていく。

特  
集

第10回日本・韓国・中国  
大学出版部協会合同セミナー

# 新しい協力関係の構築に向けて

第10回日・韓・中 大学出版部協会合同セミナーを終えて

## 小野 利家

(国際部会長、京都大学学術出版会)

第10回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーは、二〇〇六年八月二四日(二六日)に京都で開催され、無事終了した。一〇年目という記念すべき節目のセミナーであっただけに、またそれを主催する責任の重さもかさなって、ともかく大過なく終えることができたことを素直に喜びたい。理事長・事務局長・総務担当理事をはじめとする大学出版部協会幹部の皆さん、夏季研修会との合同推進のためお骨折りいただいた当番校(産業能率大学出版部)の皆さん、急遽編成された国際部会のスタッフ班の皆さん、そして何より主題発表者、こうした方々の後押しをいただいて、ともかくにも「大波」を越えたというのが私の偽らざる実感である。

この四月に国際部会をまかされ、新任ほやほやの部会長として、また開催地校という逃られない宿命を負った立場から、終始バタバタと準備を進めてきたいささか個人的な側面のことどもをも交えて、以下にこの「第10回」合同

セミナーを総括してみたい。

### 第10回三方国合同セミナーの課題

第10回三方国合同セミナーには、以下のような課題が課されていたと思う。

(1) かねて懸案であった「三方国協力調印書」の調印式を実現し、セミナーの開催のみならず、より恒常的な交流と実務的な協働・協力関係へステップアップさせる礎を築くこと。



調印式にて。左より彭松建(中国)、山口雅己(日本)、南好貞(韓国)三方国団長





歓迎晩餐会で挨拶する各国主題発表者

(2) 一〇年間の交流を回顧・総括し、今後の新たな展望を拓くこと。

(3) 主題に即した議論を深め、相互学習を推進して大学出版部の共通課題を発見すること。

(4) 「交流から交易へ」の実績づくりのため、著作権販売等の道を拓くこと。

では、実際にはどのような成果を上げられたであろうか。結果的には、幸いにもこの四点に関するかぎり、ほぼ及第点をいただけるのではないかと思っている。

まず(1)の「三方国協力調印書」の調印式は、セミナーの冒頭に予定されていた。これが実行されなければ、セミナーの意義が薄められることを余儀なくされる重要なセレモニーとして位置づけられていた。事前に日本・韓国間ではほぼ合意が形成されていたが、中国には、前年の韓国・慶州でのセミナーの団長会議でも、協会加盟の出版社の意見が集約しきれていないので調印に至らない、としていたという経緯があった。今年こそは、という意気込みで再三に

わたって意向を打診した結果、七月下旬になって原案通りの条項が、中国大学出版社協会から中国語で届けられたのである。足かけ三年、ようやく大願成就し、参加された皆さんがよくご存じの通り、セミナーの冒頭厳粛に、無事「三方国協力書」調印式を行うことができた。

この意義はきわめて大きい。調印書によれば、第一条で各種技術、情報、資料、定期刊行物の相互交換を約し、第二条で各国持ち回り式の合同セミナーを毎年開催することとしている。この条項は、中国が検討事項としてきたことだけに、これが確約されたことは大きな前進であった。第三条では図書展示会を実施すること、そして共同出版まで謳っている。第四条は親睦増進にかかわることで、協力し合うことを明示した。これらは、いずれも強制的ではなく、修正、破棄についても規定されていることは言うまでもない。いずれにせよ、この調印書が交わされたことで、これまで合同セミナーというイベントを「開催する」ことだけに重点がおかれ、われわれ自身そう認識していたきらいのあったものが、ここで明確に、より恒常的で、かつ実務的な協働・協力関係を重視することになったのである。転換した、と言ったら言い過ぎであろうが、これまでになかった場所にまで踏み入ったことは確かである。

第二点は、三方国合同セミナーの回顧と展望をしっかりやりきったことである。セミナーに対する取り組み方やこれまでの主題に合わせて何を討議し、どういう成果があっ

たかを回顧し、さらに今後の展望を披瀝し合った。少なくとも、日本と韓国は「一〇年間の回顧と展望」というテーマに即した発表をし、将来展望も具体的に示された。とりわけ韓国は、日本・韓国の交流一五年にまでさかのぼり、かつ個々のセミナーについて発表主題から発表者名までも組み込んだ詳細を極めたものであった。時間制限のあるなか、とても消化しきれるはずもなかったが、その熱意のほどには正直驚かされた。中国は、自国の大学出版社の一〇年間を回顧・展望することとなったが、これはこの一〇年のあいだに、SARS問題による日本・韓国だけの変則開催（第七回札幌セミナー）があり、実際に参加できなかった経緯があったためのやむをえない苦渋の選択であったのかも知れない。それにしても、中国大学出版社の出版事業実績が金額ベースで中国全体の四分の一を占めているという事実は重い。これから、このヴォリュームの大きさが交流にどのような影響を及ぼすかは予測できないが、大いに気になるところではある。

二つの主題発表に関する質疑応答は活発に行われた。少なくとも、私が発表者として参加した前年の第九回韓国・慶州でのセミナーに比べれば、時間も充分にとってあったし内容もまざらずといったところであろう。

### 意外な成果をあげた図書展示コーナー

当初の自信なげな構えのまま実施して、思惑以上の成果

を上げたのが四番目の著作権販売のための図書展示コーナーであった。韓国・中国に呼びかけて出品依頼をしたものの、一カ月前までの状況では、わずかに韓国・ソウル大学の書籍が京都に届いただけであった。前回の札幌では、規模はかなり充実していたものの実際に翻訳出版交渉のために照会があった事例は数件にとどまっていた。そうしたこともあって、若干規模を縮小しようということで準備を進めざるをえなかった。とりあえずは足下からということでも、日本としては各大学出版部二点の出品を要請した。事前にエントリーが寄せられたのが一三大学出版部で、書籍数は二四点であった。それぞれが当日持ち込みとしたので、申し込みなしに出品したところもあったかもしれないが、主催国としてはいかに寂しい対応と言わざるをえない（実際に後日、韓国からそのような指摘も受けた）。加盟三〇大学出版部のうち、出品校がその半数にも満たなかったことはいかにも残念であった。

さて、韓国・中国の



賑わう図書展示コーナー

出品数と合わせても総点数は約七四点と、小振りながらセミナーはオープンした。昼食時と午後の休憩時の正味一時間足らずの展示であったが、人だかりは途絶えなかった。その結果、翻訳検討用として持ち帰られた書籍数が合計で二〇点、重複した請求もあったのでそれを合算すると二六点に達した。まずは成功と見てよい数値であろう。その要因には、非常にシンプルなアプライ・シートを準備したのと展示場所のロケーションがよかったこと、があげられると思う。ほんとうの結果は、契約にまで持ち込めるかどうか今後に持ち越されるが、ともかくにも、三カ国協力調印という記念すべき日に、このような新しい芽が顔を出したことを素直に喜びたい。

こうして、第一〇回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーは、ほぼ所期の課題をクリアすることができた。まずは、なんとか一〇年という節目を画することができたのではないかと思う。——以上を、表向きの小稿の結びとしてみたい。

### 「京都らしさ」を求めて

慶州で、次回開催地が京都と決まったときは、その困難さはさほど感じなかった。韓国や中国から見れば、日本での合同セミナーが古都・京都という日本随一の観光スポットでの開催は歓迎され、なんら異論なくすんなりと受け

入れられたのも当然であろう。

韓国から戻り、改めて夏の京都での国際セミナーの開催ということの重苦しさが私を襲った。この間、大学出版部協会の地方研修地として関西が選ばれることが多く、またかという気持ちがあったことも事実である。しかも、今度は規模として最大の三カ国合同セミナーである。そして、当時（二〇〇五年一月）私は協会の副幹事長を拝命していて国際部会担当であり、所属出版部が京都大学学術出版部で他に京都に加盟出版部がないとなれば、事柄が私に集中することは火を見るより明らかであった。しかし、グズグズ言っても始まらない。セミナー会場と打ち上げの懇親会場のメインはこと腹に決めて、その案を一月末の法人化後の臨時社員総会（年末例会）のさいの国際部会で提案した。一〇〇人規模の集まりを京都でもつということであれば、会場などの手配は早めにやっておくにこしたことはないからである。

この年末までに、二〇〇六年八月二四日と二五日の夏季研修会と三カ国合同セミナーの会場は京都大学の施設を使うこと、懇親会には夏の京都を考えて河床にしようとして決めた具体的な施設探しを始めた。京都大学の施設では、時計台の百周年記念ホール、福井謙一記念館、そして芝蘭会館の三会場が候補に挙がり、河床はロケーションから貴船で探すことにした。

これらを詰めていくと、会場は空き具合や資格問題でア



三カ国協力のスローガンの入ったサイン幕を手にする  
各国団長(貴船にて)

ツというまもなく芝蘭会館に絞られ、すぐに仮予約した。貴船のほうは、たまたま知人がそのうちの一軒で働いていたということを教えられ、予算的な制約から中クラスの料亭を推薦してもらってすぐに下見をした。そして、さらにそこでもう一軒を推薦され、結局

二軒とも仮予約をした状態で年を越したのである。「京都らしさ」をどのようにして見せられるか、というのが選択基準であった。会場と宿泊施設を一カ所でこなすというところで「京都らしさ」を追求すれば、京都では残念ながら予算的に不可能である。そこで、京都大学という名前と裏京都の名所という組み合わせでこれに対応させた。それでも、協会基準価格に比べれば高い。そのしわ寄せが、結局は宿泊ホテルとそこでの歓迎晩餐会に及んでしまうこととなる。

二〇〇六年に入って、国際部会は毎月開催された。そこで、ちょっとした衝撃が走った。実務面で部会を支えてい

た副部会長の中村晃司氏(東海大学)が、学内の異動で出版部を離れることになった。それを追うように、肝心の部会長の釘澤雅春氏(玉川大学)も四月から異動になるという。途方に暮れた。救いは、韓国・中国との渉外を一手に引き受け、着実に三カ国の足並みをそろえることに専心してくれている副部会長・後藤健介氏(東京大学)の存在であった。決断のしどころであるが、私自身はそれまでの経過から部会長を引き受けざるをえず、もう一人の副部会長として徳富亨氏(東京電機大学)に就いてもらった。

四月からは、ひたすらゴールに向けて走るしかなかった。私には、翻訳・通訳団の編成という難題が残されていたが、五月になって一段落した。あとは、とくに記述するほどのことでもないだろう。——いま、改めて思い出すのは貴船のことではない。セミナーの内容でもない。二人の副部会長の姿である。後藤氏は、セミナーの司会という大役を終えたばかりなのに、散会した会館の受付にひとり残って図書展示コーナーのアプライ・シートの整理を始めていた。彼が貴船に現れたのは一時間後であった。また、徳富氏は、休憩所と商品展示コーナーづくりを担当したが、山内ホールの狭さをカバーするため二つのホールのあいだのスペースを実にうまく活用して、見事な空間を作ってくれた。そのうえ、時間の許す限りカメラのシャッターを押し続けていた。人を得たな、というのが私の今回のイヴェントのまったく個人的な総括である。

# 三カ国セミナー一〇年間の回顧と展望

三浦義博（事務局長、東海大学出版会）

はじめに

一九九七年八月二八日、諏訪湖畔のレイクサイドホテルにおいて開催された日本大学出版部協会夏季研修会に、韓国・中国大学出版部協会代表団二六名を迎えて「日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー」（以下「三カ国セミナー」）は始まった。

第一回セミナーの講演者は朴邦培氏（全南大学校出版部）、彭松建氏（北京大学出版社）、平川俊彦氏（法政大学出版局）の三名であった。

以降、三カ国セミナーは日本・韓国・中国を相互訪問しながら二サイクル（六年間）を経過し、お互いの理解も深まり議論も活発化していた二〇〇三年、開催国日本から中国大学出版部協会に対して「訪日中止」の依頼をせざるを得ない事態が生じた。

三カ国セミナーは一九八二年から一九九六年までの一五年、一五回にわたって開催された「日・韓大学出版部協会

合同セミナー」を前史とし、二五年間途切れることなく継続してきたセミナーであるだけに、「訪日中止」依頼の是非については日本大学出版部協会内部においても議論が分かれたが、「新型肺炎」（SARS）に対するリスクマネージメントを勘案した上での苦渋の選択であった。そのため二〇〇三年に開催された第七回札幌セミナーは日・韓二カ国の変則開催となった。

このような異常事態を憂慮した日・韓両大学出版部協会首脳が翌二〇〇四年九月到北京を訪れ、三カ国代表者による正常化のための調整会議が開催された。二〇〇五年の第九回慶州セミナーからは元の三カ国セミナーに復し、二〇〇六年の「第一〇回日・韓・中三カ国セミナー」を迎えることができたのは、このセミナーに対する三カ国代表者の熱い思いによるものであろう。



## 日本の大学改革一〇年

「三カ国セミナーの一〇年」と「日本の大学改革の一〇年」は、日本大学出版部協会にとって同じ位相に位置づけられる。日本の「大学改革と大学出版部」については三カ国セミナーにおいても報告されているが、改めて大学改革の一〇年を概観するとほぼ以下のようなになる。

- (1) 大学設置基準の改正（一九九一年）
- (2) 大学院重点化構想（一九九〇年代）
- (3) 「二十一世紀の大学像」答申（一九九八年）
- (4) 「遠山プラン」の提示（二〇〇一年）
- (5) 専門職大学院・法科大学院構想（二〇〇二年）
- (6) 国立大学の法人化（二〇〇四年）

このような大学改革という制度的な変化に、社会的変化（少子化、IT化）、出版業界の変化（出版不況）、法的変化（著作権法の改正）といった要素が加わり、韓国大学出版部協会、中国大学出版社協会の現状をより具体的に知りたいという欲求が生まれたものと思われる。

## 三カ国セミナーの一〇年

以下に、三カ国セミナーの開始から共通主題が導入されるまでの三年間（一九九七年～一九九九年）を第一サイクル、共通主題が導入されてからの三年間（二〇〇〇年～二〇〇二年）を第二サイクル、日・韓・三カ国開催から元のセミナーに復すまでの三年間（二〇〇三年～二〇〇五年）を

第三サイクルとして、三カ国セミナーの一〇年を回顧してみたい。

第一サイクル（一九九七年：諏訪、一九九八年：北京、一九九九年：ソウル）

この三年間のセミナー講演主題は、三カ国の「大学出版事情」と「大学出版の社会的役割」などに集中している感がある。三カ国ともに相互の確たる実情把握には至らず、情報を提供しあいながら、本格的な交流に向けた準備段階としての交流であったといえる。

三カ国セミナーの一〇年を振り返ると、この第一サイクルの期間に「相互の現状を十分には把握しきれない」といった不透明な部分が三カ国間で増幅し、この要因が働いて「相互理解と共通認識」という三カ国セミナーの道筋を描き始めたものと思われる。

このような情況の第一サイクルの中で異彩を放っていたのは、驚異的な経済成長を始めた中国大学出版社協会である。その現実をわれわれは一九九八年の北京セミナーにおいて目の当たりにすることになる。

## 共通主題と複数年議論の導入

第一サイクルの推移を受けて、日本大学出版部協会は五名の構成員から成る「国際専門小委員会」を設置し、①日・韓・中三カ国にとって複数年議論を可能にするセミナー主題とは何か、②日・韓・中三カ国のセミナー参加者にとって、相互理解と共通認識が可能なセミナーの運営形式とは

どのようなものか、の二点を中心に据えて議論を積み重ねた。

「共通主題と複数年議論」および「分科会」によるセミナー運営、という手法が導入されたのは二〇〇〇年開催の「第四回三カ国セミナー」（琵琶湖セミナー）からであるが、この実現によって三カ国セミナーは、質・量ともに大きく変化したと言える。それを可能にした背景には、日本の大学出版部の多くが、大学の変化に伴って「大学出版のあり方を再考する」必要性に迫られていたという現実と、韓国・中国ともに、それぞれの状況下において重層的な変化に直面していたという現実が三カ国間で共鳴したことによるものである。

第二サイクル（二〇〇〇年：近江八幡、二〇〇一年：上海、二〇〇二年：ソウル）

二〇〇〇年琵琶湖セミナーの主題は「大学出版部の役割とは何か―大学の変化と出版活動」であった。分科会では「編集における変化と出版活動」「製作における変化と出版活動」「普及販売活動における変化と出版活動」が主に出版実務を担う人材によって報告された。

セミナー講演録を見ると「大学の変化」「社会と大学教育の変化」「読者環境の変化」「ネット出版」「インターネット書店」などの表現が踊っている。

第一サイクルの三年間に日・韓・中三カ国が抱え込んで醸成した課題が「変化という共有概念」を得て一気に噴出

した感がある。

これらの課題は二〇〇一年の上海セミナーにおける「インターネットと伝統的出版」、二〇〇二年のソウルセミナーにおける「大学出版の環境変化と適応戦略」へと継承されて議論が白熱し、三カ国大学出版人の相互理解・共通認識が形成されていた。

第二サイクルの三年間は、

「日々にかわりつつある出版と読者環境の変化は、出版者の立場をより困惑させている。（中略）しかしひとつ明らかにすることは、これからはインターネットと結合されずに出版活動をすることは難しいということである。私ども大学出版者は変化しつつある環境に正確な認識と感覚で電子出版と既存の従来の本の長所を最大に活用し、発展させるべきである。」（朱弘均・建国

大学出版部）

と言った論調に代表されるように、「変化という共有概念」が「インターネットという共有ツール」を得ることによって、同じ方向性での議論を可能にしたことが読み取れる。

二〇〇一年の上海セミナーにおいて、中国大学出版社協会講演者として登壇した北大方正による中国における電子出版の現状報告、また韓国大学出版部協会におけるIT立国化と大学出版部の可能性などの報告は、書籍の新たな表現形態としての電子コンテンツ、書籍のインターネット販売や新たな読書層の創出などの可能性を議論する場を提供

した。

第三サイクル（二〇〇三年：札幌、二〇〇四年：北京、二〇〇五年：慶州）

第三サイクルの共通主題は「大学の教育と出版」であった。第二サイクルの議論を受けて、大学との距離をより縮めた上で大学出版のあり様を考えようとしたものであるが、先述のように、日・韓二カ国セミナーからの開始となった。

この時期になると、日・韓ともにインターネットを介した書籍販売や電子コンテンツの実際をある程度経験し、議論は第二サイクルと比較してより具体性を持ち始めるようになった。

二〇〇四年の北京では、中国大学出版社協会から李家強・清華大学出版社社長のレポートが提出され、中国大学出版社協会の発展する姿が具体的に紹介された。

セミナーが三カ国間で正常に復したのには二〇〇五年の慶州セミナーからであった。

この期間の評価は難しいが、中国大学出版社協会の経済的な成長と日本における国立大学の法人化などの大きな変化がこの間に生じていたことも事実であり、それは慶州セミナーにおいて報告がなされた。

三カ国セミナーの近未来の一〇年

三カ国大学出版社協会の二極構造化

さて、三カ国セミナーのこれからの一〇年にはどのような

な推移が考えられるだろうか。大きな流れとしては、顕著な二極構造化の出現が予測される。

二〇〇四年の北京調整会議の「中国大学出版社協会の五社が中国出版市場においてベスト一〇入りを目指す」という発言が示すように、経済成長と進学率の向上を背景として拡大を続ける市場の中で、中国大学出版社協会は更なる経済的成長を遂げるだろう。

一方、日本の大学出版社協会が直面する少子化と大学改革は、長期的な減少要因として作用し、多くの出版部は抑制された経営の安定化を指向しながら、編集・販売両機能における質的充実に向かわざるを得ないだろう。

中国と日本の二極構造化を、中国大学出版社協会の志向する「グローバル化」と、日本大学出版社協会が辿る「非グローバル化」と見た場合、三カ国セミナーの推移にどのような諸相が見えるだろうか。

中国大学出版社協会のグローバル化は、国内市場を超え、翻訳著作権の売買や共同出版を通じて国際展開を図る道筋であり、日本大学出版社協会は、日本語文化圏と独自の市場システム、漸減する市場規模の中で「非グローバル化」の道筋を辿ることも予測される。

このような構造化における三カ国セミナーの「共通課題」の設定には、一〇年間の交流とそれによって培われた相互理解・共通認識を基礎とした新たな展開が求められる。

## 三カ国協力調印書と三カ国セミナー

二〇〇六年京都セミナーにおいて「日・韓・中大学出版部協会協力調印書」が取り交わされた。協力調印書は三カ国の大学出版部交流にとって基本的な合意事項が盛り込まれたものであり、「三カ国セミナー交流を基本として、より具体的な交流への移行」が意図されていることは明らかである。「相互理解・共通認識」の形成から「実質かつ実利的な国際交流」への移行と、「今後一〇年の三カ国セミナーの実質的な交流」に向けた新たな第一歩を踏み出すことを意味するものである。

協力調印書に基づく交流は、情報の交換の他に物の交流つまり三カ国の出版物の交換（交流）も含まれる。二〇〇六年京都セミナーにおいて企画された三カ国の書籍展示は、セミナー終了後に、京都のジュンク堂BAL店に移され、一カ月間にわたって開催されるブックフェアに再展示されて日本の読者へ紹介された。

この試みを「協力調印書に基づく実質的交流の一環」と位置づけ、次回セミナーに継承し、「三カ国間の書籍展示の場」を設定することも考えられる。

また三カ国間の今後一〇年の交流を、翻訳著作権の売買や共同出版、あるいは共同市場の創出といった視点で見ると、二極構造や言語の問題は三カ国の実質的交流を阻害する要因として作用することは無いであろう。むしろ三カ国間による「著作権の共通理解」と「適切な契約形態の

あり方」などがセミナーの新たな共通課題として想定できる。

三カ国セミナーの今後の一〇年にとって必要なことは、二極構造の中において、実質的な交流とは何かを的確に捉え、理解することのできる「複眼的視点」ではないだろうか。

## 日本における大学出版部の動向

二〇〇五年七月、日本大学出版部協会は「有限責任中間法人大学出版部協会」として再発足し三〇大学出版部となった。協会未加盟出版部で組織される「大学出版部連絡会」には一一の大学出版部と大学が集い、情報交換や学習会を開催して協会加盟の準備や大学出版部設立の準備を進めている。この中には国立系出版部と大学が多く集まっている。

今後一〇年という時間の中で、日本大学出版部協会の将来を展望するならば、国立大学系出版部が徐々に協会運動の中核を担ってゆくという可能性も考えられる。その姿は未だ漠たるものであるが、この三カ国セミナーに過去一〇年以上の永きにわたって関わってきた者の一人として、日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーに新たなメンバーが集い、より実質的な国際交流へと発展してゆくことを心より期待したい。

竹中 英俊

(東京大学出版会)

本稿は、二〇〇六年八月二五日に京都で開かれた第一〇回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーにおいて同タイトルで発表した内容に手を加えたものである。

はじめに

「学術出版の国際交流」といいますと、どのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。「学術出版」の継続的維持だけで精一杯であり、ましてや「学術出版の国際交流」までとはとても、というのが大学出版部関係者の大方の思いではないでしょうか。私自身、その思いを共有します。しかし、私がここで申し上げたいのは、「学術出版の国際交流」とは、日常的な出版活動とは異なる次元にあるものではなく、足下の日々の出版活動が国際交流につながるものである、ということです。日々苦闘されている皆様への激励と連帯の挨拶の意味を込めて、これから申し述べます。

書籍出版による学術国際交流…その四つのタイプ

学術出版の国際交流ということをごどのように考えるべきか。これは、見方によってさまざまであります。研究者からみたらどうか、教育者からみたらどうか、また学生・留学生からみたらどうか、読者からみたらどうか、などなど、さまざまでありましょう。しかし、ここでは私自身の経験および今回のセミナーの趣旨にそって、焦点を大学出版部にあてて「書籍出版による学術国際交流」に限定します。

このように限定した場合でも、書籍出版による学術国際交流はいくつかのタイプが考えられます。整理してみましよう。(以下にあげた言語は、例示にしか過ぎません。)

A 相手の地域言語で出版された書籍の翻訳出版による学術交流…たとえば中国・韓国で中国語・韓国語で出版された書籍を日本語に翻訳しての出版

B 相手国・地域を対象とした書籍の出版による学術交流…たとえば中国・韓国を対象とした研究の日本語での



## 出版

C 相手国・地域の出身者の研究成果の出版による学術交流…たとえば中国・韓国出身の研究者の研究成果の日本語での出版

D 同一原稿をもとにした複数言語出版による学術交流…たとえば中国語・韓国語・日本語で書かれた原稿の中国語・韓国語・日本語の複数言語による出版  
以上、四つのタイプに分けてみました。

## 書籍出版による学術国際交流…その四つの基盤

そしてまた、書籍出版による学術国際交流にはいくつかの基盤が必要です。一般的に交流・交通といわれる場合の四つの側面、つまりカネ、ヒト、モノ、情報という観点から書籍出版による学術国際交流の基盤を捉えてみましょう。

①カネ…書籍出版による学術国際交流の資金的基盤、

②ヒト…書籍出版に携わる大学出版部の国際交流の人材的基盤、

③モノ…学術国際交流の目的・結果である書籍の（インフラを含めた）物質的基盤、

④情報…複数言語による書籍出版の言語情報的基盤、

以上のように、タイプで四つ、基盤で四つに分けて捉えますと、学術出版をめぐって現在の大学出版部の国際交流がどこまで進み、どこが課題であるかが、より明確になるのではないかと考えます。

## 留学生の学位論文の出版

ここで私が中心的に取り上げるのは、上記のタイプCであって、具体的には留学生の博士学位論文の書籍出版であります。

日本への留学生の変遷がどうなっているのか。その総数は一九七八年の五八四九人から二〇〇五年の一二万一一八二人と、ここ三〇年弱で二一倍になっております。

そのうち、大学院への留学生はどうか。一九八三年は四〇〇〇人以下（三九〇五人）で、二〇〇五年に三万人を突破しました（三万〇二七八人）。つまり、ここ二〇年余で八倍近くになっております（日本学生支援機構HP）。残念ながら、この大学院留学生のうち何人が博士学位号を取得したかの情報が得られませんでした。

この留学生の学位論文に東大出版会はどのようにして取り組み始めたのか、そしてそれを支える国や大学の制度はどのようなものであったのか、そのことについてまず触れます。

東京大学出版会の元専務理事であり（日本）大学出版部協会の幹事長を務めた石井和夫の著書に『大学出版の日々』という本があります。これは、主に、東大出版会のPR誌に連載した文章を中心にまとめたものであり、東大出版会より一九八八年に刊行されております。

\*これも「大学出版部の国際交流」の一事例といえますが、『大学出版の日々』は、北京大学出版社より当時の麻子英代

表の序文を得て中文で一九九〇年に刊行されており。また、もとの日本語版は八月に山愛書院から復刊されました。

これに収録された文章に「留学生の学位論文」と題するものがあります。これは、一九七四年六月に発表されたものです。石井によりますと、《東京大学で一九七一年から七三年までの三年間に博士号を取得した留学生の数は七〇人を超えている。問題は、その論文の公刊である。学位論文の出版について（当時の）文部省も科学研究費出版助成金を用意しているが、外国籍の著者は助成の対象とならない。東大出版会独自の出版助成を行っているが、それだけではまかないきれない。留学生の学位論文を公刊できる基金を提唱したい。》という内容です。

その後、文部省の科学研究費出版助成制度は、現在は独立行政法人日本学術振興会の管轄となりましたが、その間、「留学生の学位論文」の扱いは、いくつかの変遷がありました。

ひとつは、外国籍の著者は助成の対象とはならないという規程は変えられ、日本国籍を有する代理による申請を認める、つまり（一般的には）日本での大学院での指導教師の名前による代理の申請を認める、ということになりました。これは、大きな前進だと思います。評価したい。ただ、私どもは「学術研究は国際文化であり、その発表に国籍限定は不要である」と考えてまいりました。

そして、数年前、国籍限定がなくなり、科研費出版助成

制度はきわめて広く開かれたものとなったのです。ただし、国籍限定がなくなった代わりに、補助事業遂行の主要期間は「日本国内に居住している者」という居住限定が付されており、この面では、本国に戻った留学生や、研究や教育のために他国に移動した留学生の学位論文を基にしたものの申請は不可能であり、まだまだ改善点があると考えております。

一方、東京大学の前総長である佐々木毅先生が二〇〇一年に創設された「東京大学学術研究成果刊行助成」の制度があります。これは、「留学生の博士學位論文」も対象としており、国籍限定も居住限定もありません。これはきわめて理想的な制度といえますが、全国のすべての大学の博士學位論文全体を助成の対象とするのではなく、東大で学位を取得した學位論文に対象を限定しています。

### 東大出版会の軌跡

以上のような、①国や②大学の制度があり、さらに③東大出版会独自の出版助成制度の下で、東大出版会がこの留学生の學位論文の出版という課題にどう取り組み、どのように展開してきたか、について次に申し上げます。

留学生の學位論文の出版の軌跡をみますと、東大出版会の場合、四つの時期をみる事ができます。

第一期：一九七〇年前後から七〇年代末——始動期

台湾留學生が中心

第二期：一九八〇年前後から八〇年代末——展開期

台湾留学生十韓国留学生

第三期：一九九〇年前後から九〇年代末——拡大期

台湾留学生十韓国留学生十中国留学生

第四期：二一世紀初頭——転型期

東アジア留学生（モンゴルを含む）十中央アジア

十西アジア

大学院留学生を東京大学が受け入れて、大学院で教育し、留学生が論文を書き上げ、そして審査を受けて学位を取得し、さらに出版にいたるには、多大な労力と時間を必要とします。さまざまなケースがありますが、一〇年はかかるのではないかと、思っています。

東大出版会が留学生の学位論文を出し始めたのは、一九六九年です。台湾からの留学生です。そして一九八〇年前後から韓国留学生の学位論文の出版が加わります。そして、さらに一九九〇年前後から中国からの留学生の学位論文の出版が加わります。この時間的落差の背景には、東アジア国際地域関係があります。つまり、東大出版会が最初に手がけたのは台湾留学生のもですが、日本は台湾とは一九五〇年代に国交を結んでおります。それに続く韓国とは一九六〇年代半ば、そして中国とは一九七〇年代に国交回復・正常化をしております。この時間的順序が上記の時期区分に対応しております。

そして、国際的には一九九〇年代初頭の冷戦終焉を受け

て、留学生の学位論文出版は、これまでの東アジア留学生にモンゴル留学生が加わり、そして、中央アジア・西アジアからの留学生にひろがる勢いです。この傾向は、アジアを越えてこれからますます強まるものと考えております。

私がここで申し述べたいことは、他地域からの大学院留学生の研究成果を書籍の形で公開することは、「学術出版の国際交流」の太い柱である、ということですが、この留学生の学位論文の出版は、先にあげた「カネ、ヒト、モノ、情報」という「学術出版の国際交流」の四つの基盤のすべてが合成されて初めて成り立つということですが、

つまり、（他地域からの留学生の表現した学位論文だけでなく）一般的に①学位論文をもととして書籍を出版するためには、不採算部門であるためカネが必要ですし、②ヒトも必要です。そして、③モノとしての書籍を製作し流通させるノウハウとインフラがなければなりません。また、④複数言語情報を資料として異なる母語的発想によって表現された単言語による表現としての学位論文を評価し公開する言語編集が欠かせません。

これらを総動員することによって、他地域からの大学院留学生の研究成果を書籍の形で公開するという留学生の学位論文の出版が成り立つのです。

以上、学位論文の出版、そして留学生の学位論文の出版という、学術出版部の日常的な活動が「学術出版の国際交流」を支えるものであることを述べました。

# 韓国出版界の現状

ハンキホ  
韓淇皓

(韓国出版マーケティング研究所長)

MBC放送が、今年の八月二十七日と九月三日に放映した二部作「わが子のための愛の技術」の中で、この三五年間、子女教育の指南書として愛読されてきた『父母と子の間柄』(アリス・ギノット他著)が紹介された。その後この本は

総合ベストセラー上位にランクされ、九月一ヵ月で四万八〇〇〇部が売れた。しかし、出版社代表は喜びよりも心配を口にした。売れた本の八〇%が、寡占体制を形成している。Yes24、インターパーク、教保文庫(オフラインを含む)、アラジンなどのインターネット書店の四箇所に集中していたからだ。さらに、このままだと一部のオンライン書店を除いたすべてのオフライン書店がなくなるかもしれないという危機感からでもあった。

「売れる本」のオンライン集中はますます深刻になっていく。『2006 韓国出版年鑑』(大韓出版文化協会発行)では、二〇〇五年におけるオンライン書店の比率は一六・七%という統計が発表されているが、ベストセラーの場合

二〇〇六年下半期では少なくとも五〇%を超えよう。『父母と子の間柄』のように瞬く間にベストセラーのし上がった本は、オンライン書店での売り上げがほぼ絶対的であるとみることが出来る。

「出版および印刷振興法」によれば、刊行後一年未満の新作は、オンライン書店の場合、定価の一〇%まで割引することが出来る。しかし、実際には際限のない割引競争が行われていると見てよい。割引以外にも、マイルージ、割引クーポン、「1+1」(一冊買うともう一冊おまけがつく)景品提供など、あらゆる割引イベントが盛行していて、読者は本を買うという意思表示さえすれば、只に近い価格で入手できるのだ。それどころか、八五〇〇ウォンの本に二万ウォンの景品が付くことさえあるから、本を買うだけで利益が生まれる勘定になる。

これほどまでして出版社がベストセラーにこだわるのは、ひとたびベストセラー入りすれば、オンライン書店以外の

一般書店でも「着実に」売れることを期待するからだ。ところが読者は、割引のない本にはますます興味を示さない。こうして出版社間の過当競争がいよいよ激しくなっている。さらに一部の出版社は、一〇〇〇名前後の会員を擁するオンラインサイトに買占めを代行させたりもする。出版社が費用を負担してそのサイトの会員たちに一週間以内に本を買わせるのである。そうすれば、短期間にベストセラーに名を連ねることができるのだ。

単行本最大の出版団体である韓国出版人会は、この一月一九日、こうしたサイトを摘発したと公表したが、この種のサイトは二〇以上あるというのが出版界の公然たる秘密である。出版社がこうした非良心的な行為にまで及ぶのは、ベストセラーに落伍すると新刊が売れないからだ。それは、あたかも戸籍に名前さえ載らずに消えていくようなものだともいわれる。「こうした所業」以外のどのようなマーケティング活動も通じないと出版社は嘆いている。

二〇〇六年は、自己啓発書「天国」であった。自己啓発書分野が上述の「構造」にお誂え向きだったからだ。ベストセラー一位の『マッシュマロ物語』（ホアキム・デ・ポサダ著、韓国経済新聞社）は、九ヵ月間で一〇〇万部も売れた。刊行当初、この本の購買者全員に本の定価よりも高い日記帳を提供するという方法でベストセラー入りを果たして以来、常時攻撃的な営業で話題になった。翻訳者として、人気アナウンサー、チョン・ジョンの名前を掲げたが、

「影の訳者がいた」という論争が持ち上がり、結局チョン・ジョン氏は担当中の番組から下りるといふ事態にまで至った。

要するにベストセラーにするには、本をアイコン化して強力なイメージを発散させねばならないのだ。さもなければ、大部分が「幼児死亡」に終わってしまう。こうした現象の背後では出版界全体の沈滞が進行しているのだ。二〇〇〇年代初めまでは大変よく売れていた人文科学書は餓死状態に陥っており、急成長した児童書も尻すぼみに陥っている。ジャーナリズムで大々的に紹介された本も初版さえ捌けない例が続出しており、出版の活気などどこを探しても見当たらない。

日本とは違い、韓国の出版社は大・中規模の書店とか取次を通さずに直取引を行う。ほとんどの出版社はオンライン書店とも直取引をする。したがって現在韓国では、出版社―取次―小売書店―読者という流通機構は完全な崩壊状態にある。オンライン書店が登場するまでは、単行本出版社の売上げの比率は、取次六に対し小売は四程度であったが、現在は、取次の比率は一〇%をかるうじて超える程度である。さらに、小売書店の倒産や廃業も続出している。こうした間隙を縫うように、キョポムンゴ（教保文庫）、ヨンプンムンゴ、リブゴ、バンディエンルニスなどの書店チェーンが続々と進出している。

出版社の両極化も加速している。単行本出版社のトップ



グループの内、シゴンサを除く、ウンジン知識ハウス、ラングムハウス、ミヌムサ、ウイズダムハウスなどは最新のシステムを導入して組織と売上げを伸ばしている。これら出版社の売上げは着実に上昇しているが、中規模出版社のほとんどは下降線をたどっている。こうした中規模出版社は社員を減らして経営を合理化しているが、はじき出された人びとの創業が相つぎ、二〇〇五年だけでも新生出版社の登録数が二八〇〇余りに及んだ。そうした出版社のほとんどは、一人ですべてを処理する「ワンマン出版社」である。

ワンマン出版が可能になったのは、デジタル技術の発達による制作工程の単純化、外部委託の普及などの理由が挙げられるが、最大の理由は流通の集中である。単行本の場合、三ないし四のオフライン大規模書店チェーン、三ないし四のオンライン書店、一ないし二の取次など、一〇余りの流通業者が売上げの大部分を占める。このような構造の下では、アイディアに富んだ企画者なら「ワンマン出版」によって短期決戦しやすいので、こうした形態が増えざるをえない。とはいっても、ほとんどは資金不足で挫折する。この四年間に二二〇〇余りの新生出版社が登場したが、二〇〇五年に一冊でも新刊書を発行した出版社は二二七三社にすぎないのだ。

韓国出版界の現在の最大課題は、売上げを増やすことではなく、利益を上げることである。オンライン書店はダイ

レクトメール、広告、イベント費用、マイレージ等のマーケティング費用を出版社から支給されるので、かろうじて黒字を出し始めた。一方、そうした費用をすべて負担せねばならない出版社は苦境に立たされている。すべての費用を勘案すると、出版社は実質的にはオンライン書店定価の三五%以下の金額で本を供給している。

ある日本の小説の翻訳本は二〇万部売れたが、利益はまったくなかったという。また、あるオンライン書店はマイレージ提供、検索窓広告、イベント費用などで本の代金を一銭も貰えなかったそうだ。

出版界は、こうした構造から脱皮しようと、遅ればせながら自省の声をあげ始めた。

図書定価制を一日も早く実現しなければならぬと主張し始めたのである。こうして、大韓出版文化協会、韓国出版人会などの出版団体は、オフライン書店の連合体である韓国書店連合会と連帯して図書定価制の立法化を推進している。彼らは今年の定期国会中に法案が通過することを望んではいないが、実際に通過を期待する人は多くない。出版団体を主導している何人かが外部の圧力に抗し切れずに図書定価制に賛成してはいるものの、実際には定価制貫徹のための行動を何らしていないからだ。ある出版社は「最低価格競争」を催しているホームショッピングで飛躍的な売上げを達成したのだが、多くの出版人や書籍商たちの恨みを買っている。

韓国の電子本産業は深刻な苦境に陥っている。過去数年間、電子本の購買者は公共図書館、企業体、学校などの機関需要者であった。しかしこれらの機関は、今年は電子本の購入をしぶっている。電子本をどれほど購入しても実際に使用する人は多くないからだ。代表的な電子本企業であるブックトピアは最大のポータル企業ネイバと提携して図書検索サービス、ブログマーケティング代行などで収益を上げようとしたが、出版社サイドからは目に余る図書検索に対する公式の抗議がある一方、他の分野もさしたる効果はなく、危機に瀕しているが、これといった見通しもないようである。

(河野 進 記)

## 武蔵野大学 能楽資料センター



2005年の能楽資料センター主催狂言鑑賞会。狂言「萩大名」。右から山本則直、山本則俊、山本則孝。(撮影：神田佳明)

武蔵野大学能楽資料センターは、現在学内に七つある附属研究所・センターの中でも最も早く、一九七二年に開設された。当時、武蔵野女子大学日本文学科主任教授であり、歌人としての活動とともに、能楽の研究・評論、新作能の作詞など能・狂言に関わる活動も展開していた土岐善麿と、法政大学能楽研究所の古川久を顧問とし、武蔵野女子大学日本文学科の安藤常次郎、増田正造、小林貴という教授陣を運営委員として発足した。

能楽資料センターの開設は、新聞各紙で報じられるとともに、『能楽タイムズ』『観世』『宝生』『狂言』『演劇界』などの専門紙誌でも紹介された。在京の先行機関である法政大学能楽研究所が古文書をはじめとする文書資料の収集に大きな成果を上げているのに対し、能楽資料センターでは開設当初から、同研究所と連携を保ちながら「近現代の資料を中心とする」、「テープ・写真等の収集に力点をおく」という方向性を自らの特徴として打ち出していた。

開設二年後の一九七四年から一般公開を開始、能・狂言の演者、研究者、一般愛好者が資料を閲覧・利用できる体制を整えた。この時のセンター所属の研究員、土岐、安藤、古川、増田、小林と並んで、現センター長である羽田昶も非常勤講師として在籍していた。同じく非常勤講師に小田幸子、藤岡道子、林和利らの能楽研究者が名を連ねていた時期がある。現在は羽田昶、研究室員の別府真理子のほかに、教授のリチャード・エマート、非常勤講師の池田英悟、児玉竜一、西哲生、三浦裕子らの研究者を擁している。

その後、能楽資料センターの活動は、収集・研究・普及の三本の柱がそれぞれ年を追って充実していった。

資料収集活動としては、能・狂言の台本、譜本、研究書、定期刊行物などの資料のほか、公演の録音・録画などの視聴覚資料、プログラムやパンフレット等を扱っている。

所在地 〒180-0014東京都武蔵野市関前3-40-10  
 武蔵野大学武蔵野校舎1階  
 JR三鷹駅、吉祥寺駅、武蔵境駅よりバス約10分(武蔵野大学前下車)、西武新宿線田無駅より徒歩15分  
 閲覧日 月～木曜日、12:30～16:00(入試期間中や大学の長期休暇中など閲覧停止日あり)  
 図書貸出 期限1週間、冊数5冊まで(一部貸出できない図書あり)  
 電話/FAX 0422-52-6618  
 URL <http://www.musashino-u.ac.jp/about/researchinstitute/nohplay.html>



能楽資料センター閲覧室。開架書庫で、事前に連絡すれば誰でもセンター内で閲覧できる。

研究活動としては、「能楽資料センター紀要」を刊行し、所属研究員の研究成果を公開。設立当時は不定期刊行の小冊子であったが、第八号以来、論文、研究ノート、翻刻資料、活動記録等を収録した百数十頁の紀要を毎年刊行している。

普及啓発活動としてはセンター主催の公開講座と狂言鑑賞会が挙げられる。一九九七年に、センター研究員が講師を務める月例研究会を発足。二年後にはその発展した形として「能楽資料センター公開講座」を開催。現在も地域住民をはじめ一般を対象に、年間の統一テーマを設定して年に四回行っている。熱心なファンも多く、毎回三百人前後の受講者が集まっている。研究者のみでなく実技者も講師を務め、今までに梅若六郎・野村萬斎・中村富十郎などの能楽師・俳優を招いた。昨年度からは武蔵野大学学生と一般とを対象とする「狂言鑑賞会」を行い、座席数の二倍の応募があり満席となった。

センター開設当初は文学部(日本文学科・英米文学科)と短期大学部のみであった武蔵野女子大学が、一九九八年には現代社会学部および大学院を、一九九九年には人間関係学部を新設。さらに二〇〇三年には武蔵野大学と名称を変更、二〇〇四年に薬学部新設と男女共学化開始、二〇〇六年に看護学部新設と、数年間に拡大・拡充の途をたどった。それに伴い二〇〇六年には五日市街道を隔てた新しいキャンパス「武蔵野校舎」が整備され、能楽資料センターはその一階に移転、より利用しやすい環境が整った。

現在、資料の一般公開は月々木曜日で、事前に連絡すればだれでもセンター内で閲覧でき、書籍の貸出もしている。書籍約四千点、視聴覚資料五千点のほか、雑誌などを所蔵している。

本年度の公開講座の統一テーマは、「能楽師に聞く―年来稽古条々―」。各流派の能楽師を招き、話を聞く。聴講は無料。講師、会場、日時など詳細は武蔵野大学ホームページで公開している。

芦田頼子(武蔵野大学出版会)

# 大学出版部ニュース

## 夏季研修会概観

二〇〇六年度夏季研修会が無事終了して二ヶ月が経過した。ハンドマイクを手にした小野部会長の残影が眼裏に焼きつき、誰一人川床から落ちることなく終了できた安堵感がまだ尾を引いている。

今年度は夏季研修会の中に「第一〇回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー」が開催され、合わせて京都新聞紙上の加盟三〇出版部「共同広告」、京都ジュンク堂B.A.L店における「日・韓・中合同図書展」が併催されるなど、協会の総力を結集した三日間であった。当番校の産業能率大学出版部、国際部会・営業部会、京都大学学術出版会を初めとする関西地区四大学出版部関係各位のご協力に改めて感謝申し上げます。

## 夏季研修会

(八月二四日：京都大学芝蘭会館)

夏季研修会は、山口理事長の開会挨拶に続き、湯川記念財団理事長の佐藤文隆先生による「湯川・朝永生誕百年」の講演を頂いた。詳細は京都大学学術出版会

の新聞『素粒子の世界を拓く』に譲るとにするが、二人の学問形成の故郷である京都大学での講演には、特別の雰囲気も感じられて興味深さも一入であった。午後のケーススタディは大阪大学出版会と大正大学出版会にお願いした。加盟出版部の今後の活動の参考になれば幸いである。

## 三方国セミナー

(八月二五日：京都大学芝蘭会館)

三方国セミナーは韓国大学出版部協会二三名、中国大学出版社協会二六名の参加を得て開催することができた。今回のセミナーで特筆すべきことは、「三方国協力調印書」の締結と、「三方国図書展(翻訳著作権販売コーナー)」の設置である。

「三方国協力調印書」の締結は、韓国大学出版部協会の提案を元に、一年間に渡る三方国の調整を経て調印されたものであり、日・韓一五年の交流、その後の日・韓・中一〇年の交流を経た後の、新たな第一歩が間違いなく踏み出された。

芝蘭会館ロビーで開催された「三方国図書展示」は、その実質的な交流を示すものである。この試みは二〇〇三年の札幌セミナーにおいても行われたが、今回は「翻訳著作権売買」の検討用として三方国間で二〇点が持ち帰られるという予想を上回る成果が見られた。今後それらの書籍がどのような経過を辿るのか興味深い。協会運動の一環としても推移を見守りたい。

三方国図書展示は、二〇〇七年の中国・杭州セミナーにおいても実施されること予定されている。

「三方国協力調印書」の締結後、三方国間では、早くも「実務者会議」の設置に向けた検討がなされている。

協会加盟各出版部が、「三方国間における翻訳著作権の売買」という視点を意識した企画・編集活動を展開する日は近いのかも知れない。



## 北海道大学出版会

▼日本直翅類学会編『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』（A4判・五二五〇円・但し二〇〇六年二月三十一日まで発売記念特価四七二五〇円）日本で記録されたバッタ目全四七七種・亜種を四八〇〇枚を超えるカラー写真と的確な検索表や都道府県別分布表によって紹介。鳴き声を収録したCD付き。目と耳で調べ本格派の鳴く虫図鑑。▼山本正著『近世蝦夷地農作物誌』（A5判・三七八〇円）『近世蝦夷地農作物』三部作の完結編。江戸時代、北海道以前の蝦夷地における作物栽培の実態を膨大な史料に基づき詳細に叙述。『近世蝦夷地農作物年表』（二九四〇円）『近世蝦夷地農作物地名別集成』（三三六〇円）と併せ、北海道史研究に欠かせない基本文献。▼天野哲也・増田隆一・間野勉編著『ヒゲマ学入門―自然史・文化・現代社会』（二九四〇円）生物としてのヒゲマ、ヒゲマと人とのかわり、ヒゲマを巡る諸問題を考える、分野を超えた総合的学問「ヒゲマ学」の提唱。北大総合博物館における同講義の講師陣を軸に、様々な角度から捉えた異色の一冊。

## 東北大学出版会

▼水原克敏編著『学校を考えるっておもしろい!!教養としての教育学』TAと共に授業を創る』（A5判、三二九頁、一八九〇円（税込））本書は、時代ごとの教育課題と学校の変化の状況を、写真やグラフなど豊富な資料を用いながら、教員と学生との会話の形式で、分かりやすく解き明かしたものである。学生たちの素朴な疑問や感想を満載しているが、それは単に疑問・感想にとどまらず、「学校」の解釈が多様にあり得ることを教えてくれる。

▼岩石鉱物科学編集委員会編『アスベスト―ミクロンサイズの静かな時限爆弾―』（A5判、二二八頁、一一五五円（税込））近年、アスベストに関する不安が高まっている。例えば、関連の疾患が何十年も経て出現し、その治療法も緒についたばかりである。本書では、アスベストとその関連物質について、商品としての見地、鉱物学的な見地、医学的な見地から解説する。本書により、不要な不安をぬぐい去ると同時に、嚴重に注意すべき点を理解していただけるであろう。

## 流通経済大学出版会

▼小松佳代子『社会統治と教育―ベンサム教育思想―』A5判・一七六頁・三一五〇円

近年我国では、教育基本法の改正が喧しく議論されている。まさに教育の真のあり方が問われている。

本書は個人の自律性に依拠しつつ、なおかつ社会の統治はいかにして可能かをめぐって、ジェレミー・ベンサムの立法論・社会統治論と、その根幹に位置していたともいふべき教育論とを検討する。

ベンサムは教育術を統治の一形式と位置付ける一方で、立法とは区別されるべき私的倫理の領域のものだという。法による人々の振る舞いの統制を実質的に機能させるものとして、教育がその立法論の根幹に位置することを明らかにし、彼が構想していた社会構想にせまる。個人の自由と社会の統治とを両立させることがベンサムの課題であり、その両立のピボットに教育が位置していた。そして、近代教育がそうした個人の自由と社会統治との矛盾の中で登場してくる。ベンサムは、教育を通して近代社会を全く新しく創り出そうとした。今、必読の書。

## 聖学院大学出版会

▼古屋安雄、倉松功、近藤勝彦、阿久光晴編『歴史と神学——大木英夫教授喜寿記念献呈論文集 下巻』（A5判上製、七〇四頁、八四〇〇円）

日本における神学、また社会倫理、教育の分野で大きな影響を与えてきている聖学院大学大学院、大木英夫教授の喜寿を記念する献呈論文集の下巻が九月上旬に出版された。

執筆者は大木教授の教え、指導を受けた方々だけではなく、思想的影響を受けた方々、学問的交流を深めてきた方々からの寄稿もあるという幅の広い論文集である。田中浩一橋大学名誉教授の「近代精神の父キケロについて考える——ルネサンス・宗教改革・市民革命とのかかわりで」、田中豊治千葉大学名誉教授「ヴェーバー学問の『隠し味』」、山形和美筑波大学名誉教授の「文学とキリスト教文——果たしてアポリアか」など寄稿論文の扱う対象も範囲も幅広い。本書から、歴史と神学に深層から取り組んでこれら大木教授の思想の広がりを読むことができる。なお、本書は日本図書館協会選定図書になった。

## 聖徳大学出版会

既に予告いたしました「心と身体の癒しシリーズ」の第三巻、花沢成一（臨床心理学）、永島正紀（精神医学）共著「こころとスポーツ」は刊行が予定より遅れていますが、現在執筆進行中です。

著者はともに、オリンピック選手の心理面のアドバイザーでもあり、豊富な経験と研究に基づき、様々な具体例を取り上げながら、スポーツカウンセリングの意義や、メンタルトレーニングの説明と実践方法など、こころとスポーツ活動との関連を、科学的に、かつ具体的に説明していきます。スポーツ活動に関連するこころと身体の関係を実践的に把握し、応用することができる内容となっています。

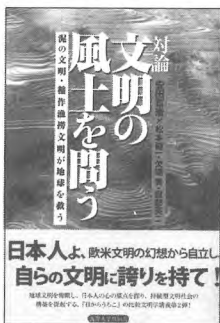
また、「心と身体の癒しシリーズ」の既刊として、音楽療法の第一人者である村井靖児著「音楽療法を語る——精神医学から見た音楽と心の関係」（二二〇〇円）と、「医療には、そのベースに人間関係への信頼がなければ真の医療とはいえない」と語る森彪著「医における癒し——人間形成のなかから」（二二〇〇円）が好評発売中です。

## 麗澤大学出版会

▼安田喜憲・松本健一・欠端實・服部英二著『対論 文明の風土を問う——泥の文明・稲作漁撈文明が地球を救う』（一六八〇円）四人の論客が談論風発、地球文明を俯瞰し、日本人の心の原点を探り、持続型文明社会の構築を提起する「目から鱗」の比較文明学講義第二弾。

▼J・スミス、M・マツコネル著／新庄哲夫訳『ラスト・ミッション——日米決戦終結のシナリオ』（二九四〇円）米国の最新資料・証言をもとに、マクロ・ミクロの視点を駆使して描ききった傑作ノンフィクション——米国側から初めて明らかにされた「日本のいちばん長い日」。

▼中野善達編著『障害者教育・福祉の先駆者たち』（二八九〇円）明治以降の障害者教育・福祉における五人の代表的パイオニアの功績と軌跡を描く。



『対論 文明の風土を問う——泥の文明・稲作漁撈文明が地球を救う』

## 慶應義塾大学出版会

- ▼佐藤望編著・湯川武ほか著『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門』(一〇五〇円)研究テーマの決め方、情報の探し方、文章の書き方等、大学生の学びの技法を分かり易く伝授する。
- ▼慶應経営学叢書第一巻 十川廣國ほか著『イノベーションと事業再構築』(三三六〇円)、第二巻 岡本大輔・梅津光弘著『企業評価と企業倫理 CSRへのアプローチ』(三三七〇円) 現代の企業経営をめぐるホットイシューを取り上げ、理論と実証の両面から分析し、新たな知見を提示するシリーズ(全六巻、第三巻以降続刊)。
- ▼加藤宗哉『遠藤周作』(二六二二五円)母への格別の愛着から文学への傾倒と宗教的情熱をたどり、狐狸庵世界に及ぶ評伝。三十余年を師弟として交わった著者が知られざるエピソードを交えて描く。
- ▼J・L・ギャデイス著・赤木完爾訳『アメリカ外交の大戦略 先制・単独行動・覇権』(二五二〇円) 9・11の奇襲が、アメリカの外交と安全保障戦略にもたらした衝撃と影響、そしてその帰結について考察する。

## ケンブリッジ大学出版局

- ▼SuperFractals (ISBN 0521844932, USD 35.00) 四色刷。複雑な図形を数学的に理論化するフラクタル幾何学を説明した、同著者の『Fractal Everywhere』(一九九八年、Academic Press 出版)に続くタイトル。
- ▼The Cambridge Dictionary of Statistics, 3rd (ISBN 0521690277, USD 40.00) 第三版。三六〇〇語以上の統計の専門用語を収録。加えて、一〇〇名以上の著名な統計学者についても簡単にまとめらる。
- ▼The Cambridge Dictionary of Sociology (ISBN 0521540461, USD 34.99) 六〇〇の見出し語を収録。各国の専門家により、社会学の従来のコンセプト及び、Globalization, IT, Terrorismなどの社会的影響をグローバルな視点で、まとめている。
- ▼English Intonation Paperback and Audio CD (ISBN 0521683807, USD 39.99) CD付。英語のイントネーションのパターンを理解し、利用する方法を紹介。各章の終わりには、練習問題付。



## 産業能率大学出版部

- ▼山口宗秋著『生涯現役』時代への挑戦―一定年後の生きがいある人生設計はできていますか―(一八九〇円)
- 今求められているのはOBの方々も永年企業で培ってきた経験と技術を定年後の生活にどう活かして反映させるかである。
- ▼石鍋信孝著『与信管理の戦略と実践』―リスク管理で勝ち残る―(二二〇〇円) 新会社法も考慮し「戦略から実践」というアプローチで与信管理を分かりやすく解説。
- ▼武田哲男著『実践的クレーム対応』(一八九〇円)
- クレーム対応について、クレームは「顧客からの貴重なプレゼント」「好意的なエールだ!」といった視点から具体的に役に立つポイントを実践的に解説。
- ▼内山力著『コーポレート・イノベーション』―イノベーションへ贈る企業変革のシナリオ―(一八九〇円)
- 企業改革の理念・意思・時代認識をもとに「企業は従業員が作り上げたもの」「改革には従業員の合意が必要」という二つの原則をベースに書かれたイノベーション必携書。

## 専修大学出版局

▼川上周三著『ヴェーバー社会科学の現代的展開——グローバル化論との結合の試み』(二三八〇円)

現代は、多量の人やモノがグローバルメディアに導かれて国際的に流動している時代である。著者はヴェーバーの社会科学理論を、マイクロマクロリンクージュ理論と位置づけ、それと現代社会理論、とりわけグローバルイゼーション論との関係づけに関心を注いでいる。賀川豊彦の思想なども論じながら、これまで取り組んできた著者の思考の軌跡が新たな機軸をえてここにある。

▼専修大学社会科学研究所編『社会科学研究叢書8 中国社会の現状』(三六七五円)

グローバル化の現象下にある現代中国の法制度、行政、産業・経済、都市構造などの面から、そこで生じている変化と現状を学際的に論じている。中国経済の国際化—貿易動態からのアプローチ、中国における中央・地方の財政関係、北京のコミュニケーション類型と近隣関係の特質、「戦略文化」論からみた「現代中国」、中国主要都市の経済統計、など。

## 大正大学出版会

▼星川啓慈著『対話する宗教』(四六判一九九五円) 現代世界の動向は、まさしく宗教間対話の重要性を指向している。宗教と戦争とのかわり、宗教間協力の具体例、「公共性」など、様々な視点を織り込んだ〈宗教間対話〉に関する最良の入門書。(TU選書4)

〈既刊〉TU選書①小峰彌彦『般若心経に見る仏教の世界』(二二一〇円) ②伊藤淑子『家族の幻影—アメリカ映画・文芸作品にみる家族論』(二二〇五円)

③廣澤隆之『唯識三十頌を読む』(一九九五円)

▼弓山達也責任編集『現代における宗教者の育成』(A5判 二五二〇円) 今、宗教者はどのように育成されているのか? 宗教者の宗教性、スピリチュアリティを一定のレベルで持続させ、どう高めてゆくかといことは宗教教団の深刻な問題の一つである。次世代の信仰の担い手の育成について各教団共有の課題を論じる。

▼近刊 松濤誠達著『古代インドの宗教とシンボリズム』(A5判)

## 玉川大学出版部

▼『TA実践ガイドブック』小笠原・西森・瀬名波編(A5判・二九四〇円) 大学院生をティーチングアシスタント(TA)として雇い、授業を手伝わせるTA制度の役割と仕事を詳しく解説する。

▼『アジアの高等教育改革』アルトバック・馬越徹編(A5判・六三〇〇円) 急激に拡大するアジア地域の高等教育。高等教育行政の分権化、私立セクターの拡大、質の保証等を分析し、将来を展望。

▼『ヨーロッパの高等教育改革』タイヒラー著(A5判・五二五〇円) EUを支えるヨーロッパ市民の育成機関へと変化した多様性よりも構造上の収斂を目指すヨーロッパの高等教育システムを論じる。

▼『脳と心と教育』バーンズ著(A5判・三九九〇円) 脳科学や神経科学と心理学・教育学の各研究成果を関連させ、それが教育現場でどう役立つのかを示す。

▼『モーツァルトスタディーズ』網野・藤澤・渡邊編(A5判・二九四〇円)

モーツァルトとは何なのか、何だったのか。音楽のみならず、その他の芸術、歴史、社会などを研究する執筆陣が、各々の角度から新たなモーツァルト像を構築。

## 中央大学出版部

- ▼細野助博著『政策統計―「公共政策」の分析ツール』（三八八五円）官と民との協働作業で公共政策を実現するために必須の分析ツールを収める。
- ▼S・ジョンソン／諏訪部他訳『スコットランド 西方諸島の旅』（二二二五円）十八世紀英文壇の巨人がスコットランド奥地を訪ね、叡智に富む社会的考察を展開する紀行の古典。
- ▼稲田寛著『一見落着―下町弁護士のこぼれ話』（二八九〇円）下町育ちの熱血弁護士の人情が綾なす人間模様を映し出し一見落着もどきの人世を描出する。
- ▼茅野信行著『アメリカの穀物輸出と穀メジャーの発展』『改訂版』（二九四〇円）世界の穀物貿易を支配する穀物メジャー。その戦略・経営行動の実像に迫る。
- ▼中央大学文学部編『恋愛 家族 そして未来』（一九七四円）現代社会の諸問題を分析し感銘を与えた公開講座の講義録。
- ▼斉藤孝著『意味論からの情報システム―ユビキタス・オントロジ・セマンティックス』（二二五〇円）ユビキタス社会は人間と情報システムとの共生社会、意味の相互理解（オントロジ）が必要になる。

## 東京大学出版会

- ▼ひろたまさき／キャロル・グラック編『歴史の描き方』全3巻刊行  
「歴史学」という知の制度を根本から問いなおしてみよう、「歴史叙述」という営みの一切合財を試練にさらしてみよう―問題意識を共有した研究者たちがその作業にとりくんだ。『歴史の描き方』は、日米の研究者たちによる、学際的、越境的な共同研究にもとづくシリーズである。
- 歴史叙述の方法を、哲学、文学研究、文化人類学、社会学などとの隣接諸分野から揺さぶる作業を通じて、過去を語るこれまでの枠組みを解体するとともに、新たな叙述をつくりあげていくための新たな素材と手がかりとを提示、そしてその実践を試みる。
- 読者に向けて「歴史の描き方」をより広く開き、新たな歴史学の可能性を追究したい。各巻定価二六二五円。
- 1 『ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』（酒井直樹編）
- 2 『戦後という地政学』（西川祐子編）
- 3 『記憶が語りはじめる』（富山一郎編）

## 東京電機大学出版局

- ▼『ヒューマノイド工学』（熊本水頼編著／三三六〇円）ヒューマノイドロボットと実際に人間が行う自然の動作との間には、明らかに大きな違いが存在する。この違いは、人間をはじめとする多くの動物が持つ「2 関節筋」に由来するものである。動物が動物たるべきはその運動であるが、本書は、その運動の仕組みを生物進化史的にたどることで、生体力学・生体工学をとらえなおし、ヒト特有の運動特性を解きほぐす鍵をわかりやすく解説することをその目的としている。
- ▼『チャンス発見のデータ分析』（大澤幸生著／三七八〇円）「チャンス」とは「意思決定において重要な事象・状況」のことであり、「チャンス発見」とは意思決定技法のパラダイムである。本書では、さまざまな実環境から入手したデータをモデル化し、さらに「シナリオマップ」などの形状に可視化して、これを入間が独自の経験と頭脳、そして何人かで構成される対人コミュニケーションを通して自らの行動環境の構造を把握する技術である「チャンス発見技法」について、体系的に解説した。

## 東京農業大学出版会

▼米大陸へ「学卒移民」史 松田藤四郎  
監修、秋岡伸彦編著

太平洋戦争後、深刻な人口・食料問題を抱えた日本で、少なからぬ若者たちが「海外雄飛」を夢見て単身、渡航していった。日本人移民史の中で、東京農大の「学卒移民」はどう位置づけられるか。

平成一八年八月／四六判

三五〇頁／税込価格三一五〇円

▼共生農業―微生物の知恵を生かし自然が蘇る― 太田保夫著

自然環境を保全し、安心安全な農産物の生産をめざすこれからの農業にとって共生農業の必要を解説した好書

平成一八年十月／A5判

一四四頁／税込価格一六八〇円

▼国際協力の農業普及―途上国の農業・農村開発普及入門― 鈴木俊著

途上国の農業・農村開発協力について農業普及の視点から整理し、途上国の農業・農村の実態に立脚した問題点の把握と解決のための方策を考察した

平成十八年十月／A5判

二四〇頁／税込価格一八九〇円

## 法政大学出版局

▼「衣（ころも）風土記」。I～IV、(松岡未紗著・四六判・全4巻・各巻二六二五円) 衣服の素材となる植物や蚕を育て、

紡ぎ、織り、染めた技と心を訪ねた旅の記録。神話の世界に分け入り伝説を収集し、今や忘れ去られた養蚕の神・機織りの神を発掘して衣服の原点を探る。自身は着ることもない絹を織った江戸時代の女たち。厳しい労働条件のもとで働いた明治、昭和の工女たち。その喜びと哀しみを思いやり、土地の人々との交流をユーマアをまじえて描きつつ、現代の衣服文化に対する批判をもさりげなく語る。

I：北海道篇／青森篇／岩手篇／宮城篇  
／秋田篇

II：山形篇／福島篇／山梨篇／長野篇  
III：新潟篇／富山篇／石川篇／福井篇  
／岐阜篇／静岡篇／愛知篇

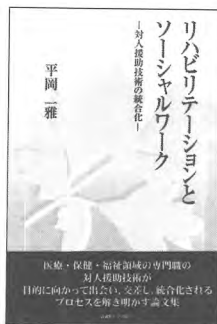
IV：三重篇／滋賀篇／京都篇／大阪篇  
／兵庫篇／奈良篇／和歌山篇



## 武蔵野大学出版会

▼「リハビリテーションとソーシャルワーカー対人援助技術の統合化」(平岡一雅著 菊判上製・三四八頁、四七、二五円) スウェーデン留学から帰国後、帝京大

学医学部附属病院リハビリテーション科チームのMSWとして始まった著者の二十年の実験と研究が、対人援助技術の統合化に向かう軌跡を示す論文集である。「リハビリ」と略称される身体機能の回復訓練を中心とする考え方は別の「本来のリハビリテーションの姿」が社会福祉に重なり、「障害を持った今の自分の方が、障害を持たなかった以前の自分よりも幸せであることを実感する」新しい価値の創造につながる援助こそ、医療・保健・福祉の各領域の専門職のチームによる対人援助の目指すところであることを、事例に即して説く。





## 武蔵野美術大学出版局

### 『美のバロキスム——芸術学講義』

谷川渥著 広汎なパースペクティブを持ち、生起し続ける「美」の現象と「芸術」作品に対して常にアクチュアルな問いを投げかける美学者・谷川渥による本格的な美学・芸術論。一章「絵画のフォルムとアンフォルム」では、プラトン、アリストテレスからロザリンド・クラウスのアンフォルム論まで、絵画作品を参照しながらイメージとフォルムの問題について論じる。二章「二〇世紀の抽象をどうとらえるか」では二〇世紀芸術の大きなテーマである「抽象」について。三章「美学講義」ではカントからグリーンバーグ、バーネット・ニューマンにいたる美と芸術と観念の問題を辿る。四章「美学問題としてのバロック」では、もともと現代的な美学問題としてのバロックを。五章「芸術終焉論とは何か」ではミニマル・アートなど現代芸術の問題を対照しつつ、そもそも終焉論がどこから生まれしてきたのかを論じる。七〇点以上の豊富な作品とともに、古今東西の美学・芸術史上の数々の理論の位相を平易な語り口で論じ尽くした一冊。予定価格三四〇〇円。三〇八ページ。二〇〇六年十一月刊行。

## 明星大学出版部

### ▼既刊

阪井・小山・木暮・中里共著

『五線譜の約束』 B5判・一三六五円

小学校の教員、音楽の教員をめざす学生のための、音楽科教育Iのテキスト。

『五線記譜』をもとにした音楽の約束をわかりやすく説明する。拍・リズム・テンポ、音符と休符、音程、音階、調号、和音、コードネーム、記号と用語など、

初歩から学ぶ音楽への入口。

▼近刊（1月刊行予定）

明星大学初等教育研究会編

『初等教育原理』（仮題）

「教育とは何か・教育の歴史」「教育内容・方法」「子どもの成長・発達」「教育法規・行政」「教師論」「学校経営」「家庭・地域・社会の教育」「障害児教育」などをテーマとして概説する。

明星大学教職課程研究会編

『教育方法の理論と実践』

教育実践で出会う課題に対して、多角的かつ洞察する力をもって対応できる専門的能力を養い、また小学校教員としての学習指導技術の向上を目指す。理論編と

実践編の二部構成とする。

実践編の二部構成とする。

## 早稲田大学出版部

▼『スウェーデン——自律社会を生きる人びと』（岡沢憲美・中間真一編、二九四〇円）福祉、出産・育児、就業、生涯学習等をテーマに取り上げて、スウェーデンの市民生活の実状を探り、自律社会とは何かを明らかにする。

▼『比較福祉政治——制度転換のアクターと戦略』（宮本太郎編、二二二六〇円）転換期を迎えた福祉国家はどこへ向かおうとしているのか。先進工業国の情勢を多角的に分析し、ポスト福祉国家の実像にせまる。比較政治叢書第2巻。

▼『マリヴォー戯曲選集』（佐藤実枝編訳、五八八〇円）生涯をかけて「自分らしさ」を追い求めたマリヴォー。翻訳六作品に作家論・作品論・年表などを加え、あえて苦難の道を選んだ劇作家マリヴォーを再発見する。





## 東海大学出版会

『水路の造形美』(渡部一二著)／B5変型判／三九九〇円)日本各地には、人々が多くの恩恵を受け、地域の歴史を深く刻んできた美しい水路が数多くある。失われつつある伝統的な水路や水利用形態の価値を再認識し、街づくりの「核」となる水路空間の保全・新たな活用を訴える一冊。

『森と水辺の甲虫誌』(丸山宗利編著)／A5変型判／三三六〇円)森林、潮間帯、砂漠、地中、地下水、高山、動物の巢等に棲む甲虫の多様性をメインテーマに甲虫の分類から最新の進化までを概観する。

『樹の中の虫の不思議な生活―穿孔性昆虫研究への招待』(柴田叙式・富樫一巳編著)／A5変型判／二九四〇円)カミキリムシやクワガタムシなどの未知なる生活を紹介し、穿孔性昆虫と寄主である樹木との興味深い関係を探る。



## 名古屋大学出版会

▼坪井秀人著『感覚の近代―声・身体・表象―』(五六七〇円) 公と私のあわいに浮かびあがる「感覚」という問題を、近代日本の文化的・政治的文脈のなかで横断的に読み解いた批評の実践。

▼大黒俊二著『嘘と貪欲―西欧中世の商業・商人観―』(五六七〇円) 中世後期、商人・商業への蔑視が商業肯定へと転換していくトポスの変容を捉えた、壮大な商業の精神史。

▼小杉 泰著『現代イストラム世界論』(六三〇〇円) その成立から激動の現在と今後の展望まで、思想と社会の動態的連関の中で捉え、イストラム復興が今日の世界にもたらした巨大な運動を描く。

▼池尾愛子著『日本の経済学―二〇世紀における国際化の歴史―』(五七七五円) 安井琢磨、青山秀夫、森嶋通夫など国際水準の経済学者を多数輩出した歴史を、国際的文脈のなかで描き出す。

▼原田正文著『子育ての変貌と次世代育成支援―兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防―』(五八八〇円) 今必要な子育て支援とは何か、大規模調査の結果から探る。

## 三重大学出版会

▼廣瀬英一著『ジョン・ドス・パソスを読む』A5版二一〇頁(本体二二〇〇円十税) アメリカの小説家ジョン・ドス・パソス(一八九六―一九七〇)の代表作『マンハッタン乗換駅』(一九二五)、『U・S・A』(一九三八)を中心に読解した研究書。『U・S・A』は、出版当時批評家を勢ぞろいさせるほど論じられたが、一九三〇年代以降は折りに触れて論じられるに止まっている。コラージュ(モンタージュ)的小説世界の集合性・全体性、また歴史としての小説(ドス・パソスの言う「同時年代記」という特質は大きな魅力である。作家としての社会・政治との関わり方も検討に値する。さらに、彼の小説を読むことは、アメリカとは何か、アメリカ的価値とは何か、二十世紀のアメリカの歴史はどういうものであったかなどを考えるきっかけにもなる。ドス・パソスの研究書は、単行本としては、わが国では「案内書」(一九六七)が二冊あるだけで、本書はこの作家の初の研究書と言ってよい。

▼世界の猿文化紀行・上高亮著・十一月刊  
▼日本修士論文賞・審査中

## 京都大学学術出版会

▼学術選書『素粒子の時代を拓く 湯川秀樹・朝永振一郎の人と時代』湯川・朝永生誕百年企画展委員会編集、佐藤文隆監修（二三三頁・一五七五円）素粒子物理学の世界を創造してノーベル賞に輝き、戦禍から復興する勇気を与えた湯川・朝永の生誕から百年——日本の誇る科学史を珠玉の評伝として読み、物理学の巨人を育んだ時代を知り、二一世紀に生きる我々にとって持つ意味を考える。

▼『ソクラテス以前の哲学者たち（第2版）』G・S・カーク／J・E・レイヴン／M・スコフィールド著、内山勝利他訳（六三〇頁・五九八五円）「世界」や「人間存在」の意味を深く問いかけた最初のギリシア哲学者たちの思索を、緻密な原典批判に基づき論じた古典的名著。哲学に関心をもつ人のための本格的案内書。

▼『身体フランス文学——ラブレールからプルーストまで』吉田城・田口紀子編（四〇二頁・四七二五円）心理から身体へ——ルネサンスから二〇世紀へ、テクストとともに変化する、「身体」へのまなざしとその表現に焦点をあて読み解いた、新しいフランス文学史。

## 大阪経済法科大学出版部

▼一九九九年に『在間島日本総領事館文書』上巻の刊行以来、待望の下巻がいよいよ刊行されました。▼その間、アジア研究所研究叢書は九五年の『朝鮮半島の非核化と日本』の刊行から昨年の『東アジア政治・外交史研究』まで12巻を数えるまでになりました。▼シリーズ番号と書名・刊行年を書き出してみると、1『在間島日本総領事館文書 上巻』（一九九五年）、2『朝鮮半島の非核化と日本』（一九九五年）、3『台湾市民社会の挑戦』（一九九六年）、4『日本外交の課題と選択』（一九九六年）、5『東アジア共生への道』（一九九七年）、6『五〇〇〇年前の東アジア』（一九九七年）、7『植民地朝鮮における社会事業政策』（一九九六年）、8『明清時代の徭役制度と地方行政』（二〇〇〇年）、9『日清戦争と東アジアの政治』（二〇〇三年）、10『元暁佛学思想研究』（二〇〇二年）、11『大國の攻防』（二〇〇五年）、12『東アジアの政治・外交史研究』（二〇〇五年）、『在間島日本総領事館文書 下巻』（二〇〇六年）となります。▼これからもアジアの様々な視点からみた叢書の刊行を目指します。▼今後ともアジア研究所研究叢書をよろしくお願いします。

## 大阪大学出版会

▼大阪大学総合学術博物館編『「みる科学」の歴史』B5判・並製・五六頁 定価一〇五〇円 天体／植物図／人体解剖／顕微鏡。巨大空間から極小の世界までを見つめ考察する江戸時代の「科学者」の図録。

大阪大学新世紀レクチャー

▼大阪大学法政実務連携センター編『企業活動における知的財産』A5判・並製・二五二頁 定価二四一五円 経済再生のキーワード「知的財産」を、企業の実務担当者と研究者による双方向アプローチで解説。

▼浅田孝幸編『産業再生と企業経営』A5判・並製・二五〇頁 定価二一〇〇円 個別企業や産業クラスターを中心とした、産業再生と企業創造に向けた一九九〇年以降のミクロ活動を論じる。阪大VBの現状や研究員によるVB事例分析も紹介。

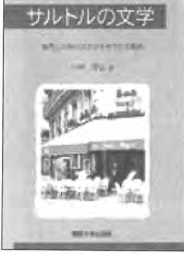
▼阿部武司著『近代大阪経済史』A5判・並製・三〇〇頁 定価二一〇〇円 江戸時代以来、市場経済が高度に展開していた大阪が、統制経済に組み込まれ、戦時期を経て大きく変貌していく変遷を、当時の企業家を紹介しながら丁寧に解説。

## 関西大学出版部

▼筒井脩著『シェイクスピアにおけるNatureの意味』(A5判・二九四〇円) シェイクスピアの全作品中に用いられている、natureの基本的な意味を考察。また、四大悲劇を含む作品論9編を収めたユニークな論考である。

▼ハリー・ダニエルズ著／山住勝広・比留間太白訳『ヴィゴツキーと教育学』(四八判・五二五〇円) 教育実践の創造に向けて、現代ヴィゴツキー学派、社会的文化的理論、活動理論を革新的な社会学論として発展させる企てを提起する。

▼川神傳弘著『サルトルの文学』(A5判・四二〇〇円) フランスの哲学者であり作家であるサルトルは、実存主義の代表者であった。本書は、二十世紀を奏でた倫理と芸術のはざまに響きわたる『受難の調べ』として表現される彼の作品を通じて、その魅力を紹介している。



『サルトルの文学』  
定価4200円

## 関西学院大学出版会

▼関西学院大学法科大学院形成支援プログラム推進委員会編

『変わる専門職教育—シミュレーション教育の有効性—シミュレーション教育の課題と方向性を探る。(A5並製・二五八頁・定価二七三〇円)

▼関西学院大学法科大学院形成支援プログラム推進委員会編

『模擬法律事務所はロースクールを変えるか—シミュレーション教育の国際的経験を学ぶ—模擬法律事務所を用いた法曹養成教育とは。(A5並製・二八〇頁・定価二七三〇円)

▼松木 真一編著

『現代科学と倫理—科学技術と人間の〈関係〉のために』第一線の科学者たちによる倫理的提言。(A5並製・二九二頁・定価二五二〇円)

▼小山 敏夫著

『ウィリアム・フォークナーの詩の世界—楽園喪失からアポクリファルな創造世界へ』(A5上製・三六八頁・定価四二〇〇円)

## 九州大学出版会

▼小川雄平著『東アジア地中海経済圏』(A5判・二四〇頁・三三六〇円) 東アジア新時代を拓く福岡発の問題提起の書

▼永添祥多著『長州閩の教育戦略—近代日本の進学教育の黎明—』(A5判・二五二頁・四五一五円) 明治中期に長州閩が構築した進学制度を解明する。

▼日本スペンサー協会編『詩人の詩人スペンサー』(A5判・四六〇頁・四七二五円) 日本スペンサー協会二〇周年論集。

▼M・クレックカー&U・トゥヴォルシュカ編『労働の倫理』「諸宗教の倫理学—その教理と実生活—」第2巻。シリーズ全5巻完結(Ⅰ)性の倫理/Ⅱ健康の倫理/Ⅲ所有と貧困の倫理/Ⅳ環境の倫理 各巻四六判・二五二〇〜二六二五円)

▼九大アジア叢書(KUARO叢書を改称)第6巻 石川捷治・中村尚樹著『スペイン市民戦争とアジア—選かざる自由と理想のために—』(新書判・一八二頁・一〇五〇円)。第7巻 緒方・矢田・多田内・高木編著『昆虫たちのアジア—多様性・進化・人との関わり—』(新書判・二一六頁・一〇五〇円)。

## 有限責任中間法人 大学出版部協会賛助会員

---

【50音順】2006年10月31日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011	東京都中央区築地5-3-2
亜細亜印刷株式会社	〒380-0804	長野県長野市大字三輪新屋1154
有限会社アベル社	〒162-0825	東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975	兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061	東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003	東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001	埼玉県志木市上宗岡3-16-2
株式会社クイックス東京	〒170-0013	東京都豊島区東池袋4-27-14 山京システムビル4F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002	東京都渋谷区渋谷2-7-7
三美印刷株式会社	〒116-0013	東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町3-4
三和印刷株式会社	〒381-2226	長野県長野市川中島町今井字薬師寺1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋4-1-11
城島印刷有限会社	〒810-0012	福岡県福岡市中央区白金2-9-6
新日本印刷株式会社	〒162-0845	東京都新宿区市谷本村町3-29
株式会社鈴木製本所	〒112-0014	東京都文京区関口1-17-5
大同印刷株式会社	〒849-0902	佐賀県佐賀市久保泉町上泉848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012	東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431	岐阜県本巢郡北方町北方148-1
土山印刷株式会社	〒601-8305	京都府京都市南区吉祥院宮ノ東町7
宗教法人天然寺	〒204-0021	東京都清瀬市元町1-4-5-711
東一紙業株式会社	〒101-0047	東京都千代田区内神田1-12-7
株式会社東京弘報社	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061	東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066	東京都千代田区大手町1-9-5
株式会社博報堂	〒108-0023	東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F
株式会社平文社	〒170-0005	東京都豊島区大塚2-35-7
株式会社堀内印刷所	〒112-0013	東京都文京区音羽1-21-11
株式会社毎日新聞社	〒100-8051	東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012	大阪府淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055	東京都千代田区大手町1-7-1

---

有限責任中間法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を発足いたしました。ここに趣旨にご賛同・お申し込みを頂きました各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。



# 有限責任中間法人大学出版部協会 加盟出版部一覽

## 北海道大学出版会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## 東北大学出版会

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## 流通経済大学出版会

301-8555 龍ヶ崎市平畑 120  
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

## 聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1  
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

## 聖徳大学出版会

271-8555 松戸市岩瀬 550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## 麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1  
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

## 慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30  
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3451-3124

## ケンブリッジ大学出版局

101-0054 千代田区神田錦町 1-10-1 サクラビル1階  
TEL Academic 03-3291-4068 / ELT 03-3295-5875 FAX 03-3219-7182

## 産業能率大学出版部

103-0028 中央区八重洲 1-3-19 辰沼建物ビル7階  
TEL 03-5205-2255 FAX 03-5205-2470

## 専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8 専修大学5号館6F  
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

## 大正大学出版会

170-8470 豊島区西巢鴨 3-20-1  
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

## 玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## 中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1  
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

## 東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内  
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

## 東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2  
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

## 東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1  
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

## 法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## 武蔵野大学出版会

202-8585 西東京市新町 1-1-20 武蔵野大学構内  
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

## 武蔵野美術大学出版局

180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7  
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

## 明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

## 早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25  
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

## 東海大学出版会

257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内  
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

## 名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## 三重大学出版会

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内  
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

## 京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## 大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺 6-10  
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

## 大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

## 関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35  
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

## 関西学院大学出版会

662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155  
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592

## 九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内  
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172